

使徒の働き17章22-34節 「知られていない神」

1A 宗教的な人々 22-23

2A 天地創造の神 24-31

1B 限定された偶像 24-25

2B 近くにおられる方 26-28

3B 悔い改めへの呼びかけ 29-31

3A 分かれた反応 32-34

本文

使徒の働き 17 章を開いてください。パウロが、アテネのアレオパゴスで、エピクロス派やストア派の哲学者、また、知識人たちに、福音を宣べ伝えます。これまでの、ユダヤ人の会堂における宣教とは、打って変わります。しかし、聖書の知識のない日本の人たちには、このパウロの宣教が、大きなヒントになるかもしれません。

それは一言で言えば、「多神教の人々に、福音をつなげる」働きです。聖書から話しても、何のことだか分からないという人々に、彼らの知っている宗教や哲学の中に入り込み、そこからイエスの復活を宣べ伝えるという方法です。主は、サマリアの女にそのことをしました。彼女が水を汲みに来ているので、「わたしの与える水は、渇くことがでなく、永遠のいのちが湧き出る泉が与えられる」と伝え、永遠のいのちを語られました。

1A 宗教的な人々 22-23

²² パウロは、アレオパゴスの中央に立って言った。「アテネの人たち。あなたがたは、あらゆる点で宗教心にあつい方々だと、私は見ております。

アレオパゴスは、この前、お話ししましたように、元々は評議会でした。そして民主制に取って替わって、その役割はなくなりましたが、人々が演説するには良い場所です。アテネを一望できるところにあります。一方には、パルテノン神殿がそびえたっています。その反対には、下方にアゴラ、市場があります。その中央に立って、パウロが言いました。

パウロは、アテネの人たちに、「あらゆる点で宗教心にあつい方々」と呼んでいます。彼は、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えました。それは、主ご自身の熱情であり、パウロは、人々が神を見出し、救われるための福音を宣べ伝える原動力としました。怒って、偶像を排斥するものではありません。

主は、同じように私たちに、神社仏閣やしきたりを見て、それが福音宣教への原動力としてほしいと願われていると思います。仏式の葬儀について、キリスト者としてどう関わるのか？いろいろな意見があります。ある人は、焼香も含めて関わります。またある人は、全く参加しません。私は、これが日本の人々にとって、死の事を考える尊い機会であるとみなしています。そして、死から復活、永遠のいのちの希望を語ります。

「宗教心にあつい」とあります。偶像が至るところにあり、ローマー世紀の政治家ペテロニウスは、「アテネでは、人よりも神に会うほうが容易い」とまで言いました。それをパウロは、「宗教的に熱い」と言いました。彼らを突き動かす宗教心から、パウロは語り始めました。私たちが、福音を語る時に、自分と関わりのあるものなのだと知ってもらうためには、このように、彼らが大事としているものから始めるのは、とても良いです。主は、先ほど話しましたように、目の前の井戸の水から、サマリアの女に永遠のいのちを語られました。接点を見つけるのです。

2A 天地創造の神 24-31

1B 限定された偶像 24-25

²³道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られていない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけたからです。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを教えましょう。

アテネの人たちの信仰は、多神教であり、汎神論です。汎神論とは、「すべてのものが神である」という考えです。そこら辺にあるものをすべて神であるとみなします。ですから、自ずと多神教です。神は数多くあるとみなします。そうした彼らにとって、神とは目に見える存在です。ところが、「知られていない神に」とある祭壇がありました。自分たちが、神々がいれば、それらに献げものをしなければならぬとして、祭壇を造ります。ところが、自分たちではまだ見出していない神、網羅していない神がいるならば、ということで「知られていない神」という祭壇がありました。

ところで、パウロがユダヤ教において、エルサレムでガマリエルの門下生であり、非常に抜きんでいたことを私たちは知っています。しかし、彼はキリキアのタルソ出身です。タルソは、ギリシアの学問が発達した町です。パウロがギリシアの哲学や学問にも、かなりの知識があります。ここの宣教では、その知識を駆使して福音を伝えています。

紀元前 600 年辺りにいたギリシアの賢人と呼ばれた詩人であり、預言者である、エピメニデスがいました。後でパウロが、「私たちは神の中に生き、動き、存在している」と言う言葉を引用しますが、エピメニデスの言葉です。テトスへの手紙 1 章 12 節で、「クレタ人はいつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢」とありますが、これもエピメニデスの言葉です。

当時、アテネで疫病が発生しました。市民の3分の1が死に、全滅してしまうのではないかと思われました。数か月、続きました。エボラのような、出血し、もだえ苦しむ類のものです。彼らは、自分たちの偶像に叫び求めました。生贄を捧げ、体に傷をつけました。助けてくださいと叫んでも、何も起こりませんでした。

そこでエピメニデスが夢を見ました、「次の朝、羊の群れがいる。群れが行くところに、立ち止まるところまで付いていきなさい。立ち止まったところで、祭壇を築き、羊を屠りなさい。疫病は去って行く。」果たして夢の通りになり、言われた通り、羊が立ち止まったところでいけにえを捧げました。疫病が二日でやんだのです。これを、エピデニスは「知られていない神」と呼んだのです。どの神か分からなかったのです。それでパウロが、「あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを教えましょう。」と言いました。ストア派も、エピクロス派も、この神の力を既に知っていたのです。

²⁴この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住みにはなりません。

どの神々も、どんな犠牲を払っても取り払われなかった疫病を取り除くことのできた神です。それは、「この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神」だということです。彼らは、人の手で造られたものを神と呼んでいましたが、事実、自分たちの手ではどうすることもできなかった存在を、知られざる神としていました。この方こそが、天地を造られた方です。

日本でも、同じですね、神という言葉を使う時に、それは元々、神道のカミのことを指していました。ですから、自然や日本という国にまつわる畏敬がそのままカミになっているのですから、多神教です。しかし、それでは到底、説明ができないことが起こります。これらの神々が行ったとは思えないことが起こります。知られざる神がおられ、それは天地の主であられる方です。

次に、「手で造られた宮にお住みにはなりません」と宣言しています。いろいろな宮があり、その最大のがパルテノン神殿です。そこに収められるような方ではないということです。ソロモンが神殿を建てた後に祈りましたね、「Ⅰ列王 8:27 それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」ユダヤ人でさえ、ステパノが神殿そのものを礼拝してしまっていることを明らかにしました。まるでそこに神が収められているかのようにみなしてしまったのです。

多神教の神と、天地創造の神の違いは、「物理的に収まるか、そうでないか」の違いです。神々は、物理的に箱や宮など、そこに収めることのできる限定的な存在です。人が自分の理解や力の中に収めることができれば、その神は自分より小さい存在です。神は、自分のより頼む存在というのが定義になりますが、より頼むべき存在が、自分自身の理解や力に収まるのであれば、どうし

てその神により頼むのでしょうか？しばしば、「神はよく分からないから信じない」と言いますが、では、よく分かったら、もう神ではないですね？と私は、聞いてきた人に突っ込みます。

²⁵ また、何か足りないかのように、人の手によって仕えられる必要もありません。神ご自身がすべての人に、いのちと息と万物を与えておられるのですから。

助けを必要としている神は一体何なのでしょう？神は、「わたしはある」と宣言されて、誰の助けも必要とせず、ご自分で存在することができます。けれども偶像は、いつも人の助けを必要とします。イザヤ書に、バビロンが滅ぼされて、偶像を運びながら逃げている姿を皮肉っています。「46:1-2 ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの像は獣と家畜に載せられる。あなたがたの荷物は、疲れた動物の重荷となって運ばれる。彼らはともにかがみ、ひざまずく。重荷を解くこともできず、自分自身も捕らわれの身となって行く。」

これと、私たちが主なる神に献げることとは、何が違うのでしょうか？それは、主が恵みを与えられ、その感謝の応答として自発的に行うことです。いけにえは、むしろ、神の恵みに私たちがあずかるためにあり、神のためというよりも、私たちのためです。神がすべてを献げる愛があるから、私たちがすべてを神に献げることによって、神と交わることができます。神の似姿に変えられます。詩篇 50 篇に、偶像に献げるように献げるのではないことを、戒めとして与えられます。

⁷「聞け わが民よ。わたしは語ろう。イスラエルよ わたしはあなたを戒めよう。わたしは神あなたの神である。

⁸ あなたのいけにえのことで あなたを責めるのではない。あなたの全焼のささげ物は いつもわたしの前にある。

⁹ わたしはあなたの家から雄牛を 囲いから雄やぎを 取ろうとしているのではない。

¹⁰ 森のすべての獣はわたしのもの。千の丘の家畜らも。

¹¹ わたしは 山の鳥も残らず知っている。野に群がるものたちも わたしのもとにいる。

¹² たとえ飢えても わたしはあなたに言わない。世界とそれに満ちるものはわたしのものだ。

¹³ わたしが雄牛の肉を食べ 雄やぎの血を飲むだろうか。

¹⁴ 感謝のいけにえを神に献げよ。あなたの誓いをいと高き神に果たせ。

¹⁵ 苦難の日に わたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出し あなたはわたしをあがめる。」

偶像は、自分が献げないと怒られるとか、宥めるために必死になって、神々を見失いように網羅します。それが、いたるところに偶像がある所以です。恐れがその動機です。まことの神への献身は、恵みその動機です。

そして、「すべての人に、いのちと息と万物を与えておられる」という方です。今、たった今、その

息について、自分でどうにかなるのでしょうか？いいえ、神などいない、自分を信じているから、という方は、では、自分の力で息をしてください。酸素も創造して、毎回、意識して息するようにしてください。あり得ませんね。これだけでも、いのちを与える存在、神がおられることが証しされています。

バビロンの最後の王、ベルシャツアルは、エルサレムから奪ってきた、神の宮の金銀の器を使って、ぶどう酒を飲み、自分たちバビロンの神々を賛美しました。その時に、白い塗り壁に人の指が現れて、何かを書きました。解き明かしのために連れて来られたダニエルは、王の滅びを宣言しますが、その前に彼の愚かさをこう述べています。「5:23 それどころか、天の主に向かって高ぶり、その宮の器を自分の前に持って来させ、あなたと貴族たちとあなたの側室や侍女たちは、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」人の息を手に握っておられます。

2B 近くにおられる方 26-28

²⁶ 神は、一人の人からあらゆる民を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、住まいの境をお定めになりました。

パウロが、次に取り組んだのは、国民にしたがった神々です。それぞれの国民が、神話を持っています。日本であれば、日本書紀にある神話です。聖書時代の民は、モアブであればケモシュ、アンモンであればモレクなど、民がその国を代表する神を宿していました。ギリシアは、もちろんギリシア神話による神々を有しています。多神教の世界では、それぞれ地域の神々があり、その地域で尊ばなければいけないとされました。イスラエルの民が、カナンの地に入り、容易に偶像礼拝に陥ったのは、エジプトにいた時はエジプトの神だが、カナンに入ったのだから、カナンの神々を尊ばなければいけないとする、多神教の考えに影響されていたからだとも言えます。私たち日本人にも、通底する考えですね。場所によって、敬うべき対象を変えるのです。

アテネ人たちは、ギリシアの神々をあがめ、そして、その都市の名のごとくアテーナーが守護神でした。パルテノン神殿は、アテーナーが祀られています。そして、自分たちが、アテーナーのご加護があつて、選ばれた民だと思っていました。

けれども、すべての人は息をするし、同じ人間です。多神教の神々は、このあまりにも自明な事実に答えられていません。科学的に、すべての人が初めは同じところから、同じ人から出て来たことを指し示しているのです。それは、聖書に啓示されている真理と合致しています。神がアダムを造られ、そこからすべての人たちがいます。そして、ノアの時代のその家族を除き滅ぼされましたが、ノアの家族から民族、言葉が分かれ出ました。地に満ちました。

そして、「それぞれに決められた時代と、住まいの境をお定めになりました」とあります。創世記 10 章に、民族や国々の分布図があります。その広がり、神がそうされたものです。そして主は、言われました。「申 32:8 いと高き方が、国々に相続地を持たせ、人の子らを割り振られたとき、イスラエルの子らの数にしたがって、もろもろの民の境を決められた。」イスラエルは選びの民ですが、他の諸国も、主がそれぞれの国に土地を与えられました。

²⁷ それは、神を求めさせるためです。もし人が手探りで求めることがあれば、神を見出すこともあ
るでしょう。確かに、神は私たち一人ひとりから遠く離れてはおられません。

それぞれの国、また境があります。時代もあります。その区別によって、それぞれの文化や歴史、そして伝統があります。そこで国々の人々は、自分たちの神を造っていったのですが、それが間違いです。しかし、ある意味で、求道を始めたと言ったらよいでしょうか、神がおられるということが分かるようにされたのです。聖書には、イスラエルだけでなく、周囲の国々にも神が語りかけておられる預言が数多くあります。そうやって、神が分かるようにされたのです。ですから、多神教、異教だからといって、無碍にすべてを否定するのではなく、そこにある彼らの求道の心を認めます。

そして、「神は私たち一人ひとりから遠く離れてはおられません」と言われています。まだ一度も聖書を読んだことがない人、イエス・キリストの名を聞いたことのない人でも、神がおられるということにすぐに気づくようにしてくださっています。私もこのことを知って、信仰に至りました。遠くに神がいるものだと思っていたら、生活のあらゆる面で神がおられることを知ったのです。父親もそのことを言っていました。私が、神が近くにおられることを話したことがあったようです。そのことが、かなり求道している時に助けになったようです。

エピクロス派の人たちは、どこか遠くにいるかもしれないけども、神は分からない、いないとしていました。しかし、それを否定しています。神はそばにおられるのです。

²⁸ 『私たちは神の中に生き、動き、存在している』のです。あなたがたのうちのある詩人たちも、『私たちもまた、その子孫である』と言ったとおりです。

「私たちは神の中に生き、動き、存在している」が、彼らの詩人エピメニデスの言葉です。そして、アラトスが、「私たちもまた、その子孫である」と言いました。アラトスは、ストア派の詩人であり、パウロと同じキリキアの人でした。ですから、パウロは、彼らのことをよく知っていたのです。そして、二人ともキリストの神について語っていないのですが、まことの神にも言える言葉だったのです。それで、パウロは彼らのよく知っている言葉から、まことの神を伝えているのです。

3B 悔い改めへの呼びかけ 29-31

そこで、パウロは呼びかけを行います。ここまでは、パウロは彼らとの接点を語りました。しかし、接点はあくまでも接点であり、本質は、彼らの信じている神々を否定することになります。宣教は、相手の文化や宗教を全否定しません。しかし、彼らの宗教の誤っている部分をそれでいいよ、とは言いません。宣教はあくまでも、その住んでいる人々に寄り添いますが、それは、まことの神、キリストを知っていただくためです。

²⁹ そのように私たちは神の子孫ですから、神である方を金や銀や石、人間の技術や考えで造ったものと同じであると、考えるべきではありません。

天地を創造した神の子孫である人間が、人間の作ったものを神だとすること自体がおかしいのです。イザヤ書 44 章に、偶像を造る者たちの空しさが書いていますが、木の半分で薪にして、暖かいと言って、その同じ木の半分で、像を造って、神よと叫ぶ。これはどう考えてもおかしいです。

³⁰ 神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。

神は、ご自分がおられることをはっきりさせる時を定めておられました。それが、イエスが来られ、死んでよみがえる時です。ローマ 3 章にも、パウロはこう言っています。「神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。」神は寛容を持って見逃してこられましたが、今はその定めの時が来ました。キリストが現れました。

ですから、これまでは知らなかったの見過ごされました。しかし、今や違います。はっきりとパウロは、「すべての人に悔い改めを」呼びかけています。これまでのあり方を捨てて、思い直して、生けるまことの神に立ち返ることです。宣教のことばは、宗教的対話とは違うのです。寄り添います。共通点を探します。しかし、それは、まことの神とまことの主、イエス・キリストに立ち返るためのことばを語るためです。

³¹ なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

神は、一人の人、アダムによって人々を造られましたが、同じように一人の人によって、世界を正しくお裁きになることを決めておられます。イエスです。「ヨハ 5:27-29 また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。28 このことに驚いてはなりません。墓の

中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

神が、一人一人をよみがえらせて、御子によって裁かれます。悔い改めて、この方を信じたか、そうでないかで裁かれます。そして、そのよみがえりの初穂としてイエス様がまずよみがえらえました。この方はもはや、ローマの僻地のイスラエルで死んだ人ではなく、神の御子として公に現れました。ゆえに、すべての人が神に申し開きをして、神の裁きに服することになるのです。一人一人が、死んでもよみがえり、そこで地上で行っていた時の行いについて申し開きをします。

私たちは、圧倒的に神を知らない人々に囲まれている中で、イエスの御名による救いしか、この世界にはないのだと宣言することは、大胆であり、勇気が要ります。けれども、これは真実です。神が裁かれるのは一人の人によってであり、イエス・キリストご自身なのです！

3A 分かれた反応 32-34

³² 死者の復活のことを聞くと、ある人たちはあざ笑ったが、ほかの人たちは「そのことについては、もう一度聞くことにしよう」と言った。³³ こうして、パウロは彼らの中から出て行った。

彼らは、創造主なる神、人の起源、神と人との関係まで聞いていましたが、悔い改めの招きを聞いたら、こういう反応になりました。それぞれが、光に導かれると、自分の闇が明らかにされるからです。悔い改めて真実に近づくのですが、それをしない人々は、「あざ笑う」あるいは「もう一度聞くことにしよう」という反応になりました。

ギリシアの人たちにとって、死んだら終わりというのが当たり前です。そして、魂は続いたとしても、からだがよみがえるということについては、あまりにもかけ離れた考えです。世俗化された日本人もそうではないでしょうか？多くの人が死んだら終わりと思っています。けれども、その後に、その人の影響が後世に伝えられるということはあります。あたかもその人がいるかのように、みなすこともあります。けれども、からだがよみがえることはあまりにも唐突です。

そして、復活するのであるから、死ななければいけません。死んでいるからよみがえるのです。キリストの死について、彼が十字架にはりつけにされたことは前提として語っていた事でしょう。ギリシア人には、愚かであるとパウロは、コリント第一 1 章で話しています。それは、あまりにも不条理な形で死ぬなんて、愚かの極みだとみなしたからです。そして復活は、なおさらのこと絵空事にしか聞こえません。

なので、「あざ笑う」という反応がありました。そして、「そのことについては、もう一度聞くことにしよう」というものがありました。はっきりと断らないのですが、実質、断っています。あとに引き延ばす

ことによって、いつまでも引き延ばすからです。後にパウロは、総督フェリクスに語りました。「使 24:25 しかし、パウロが正義と節制と来たるべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなり、「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする」と言った。」フェリクスは総督から罷免されて、二度と、その「折を見て」というのは来ませんでした。

³⁴ ある人々は彼につき従い、信仰に入った。その中には、アレオパゴスの裁判官ディオヌシオ、ダマリスという名の女の人、そのほかの人たちもいた。

ここが、アテネにおける宣教の実です。わずかな人々です。「ダマリス」という女の人ですが、男社会であるギリシアにおいて、彼女がいるということは、もしかしたらふしだらな、売春女だったかもしれません。あるいは、愛人であったかもしれません。けれども、「アレオパゴスの裁判官ディオヌシオ」もいるのです。主は、どの人も、それが社会的に疎外されている人であっても、あるいは社会的地位のある人であっても、同じように救ってくださいます。

彼は聖書ではここだけしか出てきませんが、エウセビオス著の「教会史」によれば、ディオヌシオはアテネで教会を建て上げました。マリアの死を看取ったと言われています。ドイツ、イタリア、スペインに福音を伝え、96年、ちょうど黙示録の七つの教会の時代、殉教を遂げました。

私たちが日本の地において、わずかな人たちしか救われないということですが、パウロのように、どんな機会を使って、福音を語り続ける忠実さが求められます。そして、悪い意味で心地よくなつてはいけません。偶像がいっぱい心に憤りを抱きましたが、真理を偽りに取り替えていることに対する憤慨を、正しく、純粋に抱いているべきですね。それはもちろん、愛による憤りです。人々を、キリストにあって愛する情熱です。